

第3版の序

2013年に第2版を送り出したのは、丁度新たに6年制薬学教育課程を修了した薬学卒業生が社会に船出して間もない頃であった。それから早くも6年が過ぎ去ったが、幸い第2版も初版と同様に読者諸氏に好評をもって迎えられ、増刷を重ねている。しかし、医学の進歩は速いため医学関連書籍の寿命は短いのが宿命である。極論すれば出版されたその時点から、記載内容は最先端の情報との解離が始まるのである。実際、第2版を上梓して以来の薬物治療の進歩は目を見張るものがあり、例を挙げれば悪性腫瘍の化学療法、糖尿病やC型ウイルス性肝炎の治療は画期的な新薬の登場により標準治療が一変したと言っても過言ではない。幸いなことに、この度、出版元である羊土社のご好意もあり、著者らは6年間の遅れを取り戻した第3版を送り出すこととなった。

本書は、多くの薬物治療の教科書が系統的な病因・病態解析に基づいて標準的な薬物治療を記載するアプローチであるのとは異なり、初版以来、個別の症例解析から患者の薬物治療を考えるアプローチをとってきた。第3版においてもこの方針は堅持され、さらに症例数を増加し、対象疾患項目を見直し、記載についても最新のガイドラインに準拠して大幅に書き直した。今もし第3版を手にとって通覧されれば、疾患によっては全くの新規書き下ろしに近い部分もあることがわかるであろう。今回も多大な努力を傾注された執筆者の方々に感謝する次第である。今回は内容の一新に合わせて表紙も変更されたが、読者諸氏に好意をもって迎えられれば幸いである。

2009年の初版の序を読み返すと、6年制薬剤師教育の開始にあたり、薬剤師が薬物治療に対してより深く関与して行くための助けとして本書を執筆した著者らの意気込みが感じられる。今後は、薬剤師は医師の考えた薬物治療の意図を患者に対して正しく説明するだけでなく、医師と共に患者の薬物治療を考え、責任をもてる立場に進化しなければならない。すでに欧米諸国では薬剤師の薬物治療への参画は日常的になっている。在学中の病院・薬局実習だけでなく卒業後に自信をもって薬物治療に参加できるように個別患者の薬物治療を考えるアプローチをとる本書の意義はますます高まっていると信じている。

2019年9月

執筆者を代表して
明治薬科大学 特任客員教授
越前宏俊

初版の序

従来の薬科大学での臨床教育に最も欠けていたのは学生の症例解析能力の鍛錬であつた。4年制薬剤師教育のカリキュラムの下での薬物治療学の教育は、主として授業時間数の足りなさから疾患の病態生理と薬物治療との繋がりが理解できるレベルに学生を導くのが現実的な教育目標であり、その知識を自在に使いこなして症例解析を行うレベルの教育は学部卒業後の臨床薬学大学院での教育に委ねられていたのであった。

しかし、6年制薬剤師教育では5年次に長期の臨床実習が学生全員の必修科目として設定されており、周到な事前教育も実施される。この機を活かして実践力のある薬物治療教育を行わなくてはならない。そのためには、患者の病態を診療録の問診記録や臨床検査値から読み取り、知識として修得した薬物の薬理学や体内動態学を目の前の患者の薬物治療に活かす訓練が必要である。これは薬剤師教育に関わる者達に等しい思いであった。そのような折り、羊土社から新しい薬剤師教育に活かせる副読本製作のお誘いを受けた。そこで、同じ思いを持つ医師または薬剤師の経験を持つ薬科大学教員を中心に執筆陣を組織し、従来にない視点で「症例で身につける 臨床薬学ハンドブック」を編纂したのである。

この本は既に多数上市されている薬物治療学の系統的な教科書ではない。薬学生の臨床教育の観点から創作した多くの症例の中に薬物治療のtipsをちりばめたハンドブックである。一通り系統的に薬物治療を学んだ薬学生は、本書で薬物治療学の実践的演習を行うことをお勧めする。少人数グループでの演習教材として使用するのもよいだろう。この本をマスターすれば長期の病院・薬局実習に自信を持って臨むことができる薬物治療の能力を養うことができるはずである。

6年制薬剤師教育を受ける学生は、医師不足、医療の公開制への社会の関心、薬物治療の納得と同意への患者意識の高まりなど、薬剤師が医師と看護師と共に医療に貢献することを社会が期待しているという千載一遇の追い風の時代に臨床実習を行うことになる。薬物治療における医師の力強いパートナーであり、公平な立場での患者の擁護者であり、薬物治療の信頼できるリスク管理者として育って行く学生達の薬物治療教育に、本書がいささかでも役立つなら執筆者一同これに勝る喜びはない。

2009年3月

執筆者を代表して
明治薬科大学薬物治療学
越前 宏俊